
IS＜インフィニット・ストラトス＞ ふもっふ？

ユーリ・ローウェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス> ふもっふ？

【Nコード】

N3648Y

【作者名】

ユーリ・ローウェル

【あらすじ】

夏休みのある日、宗介とラウラはアリーナで訓練をしていた。だが二人は突如現れた光に包まれ、気づいたらアリーナのままだったが…

これは、インフィニット・ストラトスふもっふ？の宗介とラウラが原作に介入してしまう話です。

第1話・同じようで別の世界（前書き）

前々から考えていた宗介とラウラのIS原作介入のお話です。ストーリー上、同じキャラが二人出てくることもあると思います。主にラウラが：

ではどうぞ。

第1話・同じようで別の世界

「いくぞ宗介」

「来いラウラ」

夏休みのある日、学園のアリーナで珍しく模擬戦をしている二人。次第にお互いの攻防が激しくなり、ラウラはアロンドイト、宗介はディムロスを振りかぶり、空中で激しく激突する。

その時、二人を中心として光が発生して二人はその光に包まれてしまった…

「いたた。ちょっと無理をしすぎたかな」

「あ、ああ」

二人は気づくといつの間にか機体から降りていた。と、そこに見なれた黒いスーツを着た千冬が現れた。

「すみません織斑先生。少し派手に…」

宗介は千冬に謝ろうとしたのだが…

「誰だ貴様は、それに…何故ここにお前が居るのだボーデヴィツヒ？」

「何を言っているのですか先生。宗介ですよ」

「だから誰なのだ貴様は。ボーデヴィツヒ、その男、私についてこい。無論、拒否権は無い」

意味が分からないでいる二人は頭に？を作りながら千冬について行く。行きついた先は学園の職員室だった。

「まず一つ、お前は何者なのだ？」

「…自分は相良宗介であります」

「何を目的に学園に侵入してきた」

「侵入などしていません。自分はここの生徒であります」

「嘘を言うな。この学園はISの関係上、一人の男子生徒しかおらぬ、当然お前では無い」

千冬に言われる宗介は学園に転入してきた時の学生手帳を千冬に見せる。

「これが証明であります」

千冬はまじまじと生徒手帳を見る。

「確かにここの生徒手帳だな、ではどう言う事なのだ…」

ここまで静かだなと思った宗介はラウラの方に視線を移すと、ラウラは手近にあった新聞を呼んでいた。

「おい宗介、日付が四月だぞ。私達は確か夏休みの八月だったはず…」

「何、では俺達は過去に来たのか？」

「いや…織斑先生。少しパソコンを借ります」

「おい、勝手な…」

千冬が制止を掛けようとするが、ラウラはそれ以上早く動いてパソコンの前行き、色々と調べる。

「やはりな…」

「どうだったラウラ？」

「ああ、この世界にASは存在していない」

「……つまり、俺達はまた違う世界に…世界線を越えたと言うのか？」

「ああ、そのようだ」

「おいお前達。いい加減説明してもらおう」

千冬はドンッと机を叩きながら言う。その表情は今にも怒りそうな感じだった。一般人が見れば間違いないく怯える位の迫力だがこの二人は慣れているためサラツとしていた。

「はい、私達は違う世界から来たとい事になります」

「…ボーデヴィツヒ。お前はいつからそのようなふざけた事を言うようになったのだ？」

「いえ、結構真面目なんですけど…宗介。どうする？」

「そうだな…これを見せて見たらどうだ？」

そう言いながら宗介はポケットから一枚のカードを取り出した。そう、サモンカードである。

「なんだそのカードは？」

「もう一度外に出て貰っても構わないでしょうか？」

「いいだろう」

三人はもう一度先ほどのアリーナに向う。そして宗介はカードを軽く操作して、その場でアーバレストを取り出す。

「なっ…これはIS…？」

「いえ。これはASです」

宗介は千冬にASの事を説明する。説明を聞いている千冬の顔がだんだんと険しくなっているのを二人は気づく。

「全身装甲。こんなの私は今までに見たことが無い…」

「ASは俺達の世界では普通に普及しています。これが証拠です」

「…しかたがない。お前達が違う世界から来た事は信じよう」

千冬はようやく信じてくれたようで二人はホッとする。

「そうなるとお前達にはこちらの学園に入ってもらおう事になるが…」

「自分は問題ありません!!」

「私はもっと夏休みを満喫したかったのに…」

こうして二人は違う世界のI S学園に編入する事になった。

「ところでボーデヴィツヒ。先の話だとお前は今この世界に二人居る事になるのだな？」

「そういえばそうなりますねって宗介。凄いで、自分に会えるんだぞ!!」

何故か自分に会えると言う事にテンションが上がっているラウラであった。

第1話・同じようで別の世界（後書き）

原作の時間軸はセシリアとの決闘二日前です。次は宗介と原作セシリアとの戦いです。

第2話・宗介とラウラ、転入する（前書き）

と言ってもIS学園↓IS学園に転入と言うややこしい展開になりますね。

第2話・宗介とラウラ、転入する

その後、寮の部屋を一つ貰うことが出来た宗介とラウラ、本当は男女別々なのだが部屋が無く二人は同じ部屋になったのだが。二人はもう何度も同じ部屋で生活をしているのでいつもと余り変わらずだった。

そして次の日、二人は千冬に連れられて教室の前に連れてこられる。勿論一年一組だった。

「静かにしろ、今日急だが二人転入する事になった。入ってこい」

千冬に言われると二人は教室に入ってくる。

「では二人共、自己紹介をしろ」

「はっ!!」

まず、前に出たのは宗介だった。

「自分は相良宗介であります。趣味は釣りと読書、主にA S 図鑑を愛読しています」

クラスの皆は「AS図鑑？」となっているが、ラウラだけ笑いをこらえていたのだ。

「わ、私はラウラ・ボーデびっぴ…でしゅ…」

そして、ラウラは自分の名前を囁んで滅茶苦茶顔を真っ赤にしていた。そして、静かだったクラスが…

「きやあああああ。二人目の男子キター」

「織斑君と同じワイルドそうでイケメンよー」

「ラウラちゃんも可愛すぎてお持ち帰りしたいよー」

クラスが急に騒がしくなり、二人はびっくりして一歩後ろに下がってしまふ。

「静かにしろお前ら。相良は織斑の隣、ボーデヴィッツは相良の隣だ」

宗介とラウラは元の世界と全く同じ席に座った。

「では、授業を始める…」

授業が始まって三十分、お決まりのようにラウラは睡眠、千冬の出席簿アタックが頭に炸裂していた。そして休み時間。

「えっと相良だよな。俺は織斑一夏、いや、男が来てくれて助かったぜ。男どうし仲良くしようぜ」

隣に座っている一夏が話しかけてきた。

「ああ。俺はかまわん」

「それにしても、千冬先生の出席簿は痛いな」

頭をさするラウラ、だが元の世界でも千冬のハリセンを受けているラウラだからこそこれだけで済んでいるのだ。

「おっ、私も友達になってくれるか一夏？」

「あ、ああいいぜ。俺はラウラって呼んで良いか？」

「構わないぞ」

すると、三人の元に金髪ドリル元いセシリアがやってきた。

「あら、男性である貴方は何故ここに居るのですか？」

「いろいろと事情があるんだオルコット」

「まあ、初対面なのに馴れ馴れしいですわね」

そこで宗介はしまったと思った。宗介はいつものようにセシリアに話しかけてしまったのだ。

「それで貴方はどれ位ISを動かせるのですか？」

「俺はISでは無い、ASに乗りだ」

セシリアは聞き慣れないASについて聞き直そうとしたが、そこで次の授業のチャイムが鳴り、セシリアは席に戻って行く。次の授業もISの座学、ラウラにとって退屈以外何者でもなく睡眠、千冬の出席簿アタックの流れ。その次の授業ISを使った実践授業だった。

「今日、お前達にとって初の実践授業だ。心してかかれ」

アリーナに一組の生徒全員ISスーツを来て並んでいた：宗介とラウラ以外は。

宗介はいつものパイロットスーツ。ラウラにいたってはTシャツにハーフズボンの姿だった。

「相良は良いとしてボーデヴィツヒは：仕方が無い、今日はそれでいい。ではまず、専用機持ちの動きを見て貰う。オルコット」

「はい！！」

すると、セシリアは直ぐに愛機、ブルーティアーズを展開して空を飛ぶ。皆は滅多に見ない専用機に目が行っているが、二人は違う所を見ていた。

「あれは初期のブルーティアーズだな」

「ああ。武装もフィンでもないからな」

そうこうしている内に、セシリアは地面に着地していた。

「これが、ISの中でも特別なもの、専用機だ。これは国家の代表及び候補生にしか与えられないものだ」

千冬の発言に皆、真剣に聞いている。

「よし、今から各班ごとに別れて実際に動かしてもらおう。打鉄を用意して来るから少し…」

「すこしよろしいでしょうか」

そこに宗介が手を上げて千冬の動きを止める。

「何だ相良？」

「オルコットと模擬戦をしたいのですがよろしいでしょうか？」

宗介の発言でクラスメイトはびっくりしていた。セシリアや後ろに居る箒もだ。

「あ、あなた。専用機はお持ちなのですか？」

「ああ。問題ない」

ここで、千冬は未知数の宗介の実力とASの能力を見定めるチャンスかと思う…

「いいだろう。ただし、時間は三十分だけだ」

すると、アリーナには宗介とセシリアの二人のみ。他の皆は観客席に移動していた。

「では、貴方の専用機を見せていただけるかしら？」

（レーバテインでは差がありすぎる。ここは…）

宗介はサモンカードを取り出し、アーバレストを出して乗りこむ。

「ぜ、全身装甲！！」

「では行くぞ」

宗介は単分子カッターを右手に持ちセシリアに斬りかかる。だが、セシリアはすぐさま上空に飛ぶ。

「あら、もしかしてそのISは空が飛べないのですか？それなら…お別れですわ」

そう言うセシリアは主武装のスターライトmark?を撃つが、宗介は素早く避け、後ろ腰に装備してあるボクサーで応戦する。

「な、なあラウラ。宗介のあれって飛べないのか？」

「ああ。ASは基本、飛行は出来ないのだ。だが問題あるまい」

「何でだよ？飛べないのは不利だぞ？」

「ふっ、その程度。あいつにとって差異ではないからな」

正直、セシリアは焦っていた。最初、宗介のアーバレストを見た時、全身装甲で防御型と思った。だが、俊敏に動き、飛行が出来ないと知った時は何とかなると思ったが、またもやアーバレストはちゃんと自分の動きに対応していたのだ。

「アル、データ収集はどうだ？」

『全て終了いたしました軍曹』

「よし！」

宗介は今の今まで積極的には攻めていなかった。その理由はブルー

ティアーズのデータを集めていたのだ。そして、それを終えた宗介はアーバレストをセシリア目がけて跳んだのだ。

「さあ、これが私のブルーティアーズですわ!!」

セシリアも背中にあるBT兵器を四つ宗介目がけて飛ばす。

(ストライク・ブルーティアーズのフィン・ファンネルより遅い、なら)

アーバレストは空中で両手に単分子カッターを握り。次の瞬間、それを二機のBT兵器に投げ同時に仰向けにあり両足の裏に内蔵してあるヒートダガーをもう二機のBT兵器目がけて放つ。

すると次の瞬間、四つのBT兵器は同時に爆発して、それを見るセシリアは驚く。その隙に宗介はスターライトmark?にワイヤーを絡ませて接近する。

だが、セシリアの表情がニヤリとして…

「かかりましたわね、BT兵器は六個ございまして…」

だが、セシリアの目の前にアーバレストの姿が無かった。そう、アーバレストはターザンの様にワイヤーを利用してセシリアの背後に振り子のように周り、片手でボクサーを撃ちセシリアのシールドエ

エネルギーを大幅に減らす。

散弾銃をもろに受けたセシリアはそのまま地面に何とか着地するが…

「チェックメイトだ」

セシリアの目の前にディムロスを構えている宗介がそこにいた。

（A S：最初はどんなびっくり兵器が出ると思ったが見た感じI Sと大差はない。だが、あいつの技量は以上だ。相良はあれでまだ本気を出していない）

今の戦いを観客席で見ていた千冬は考える。だが、彼女の考えは大半当たっていたのだ…

（これは世界にどう影響をもたらすか…だな）

これは織斑一夏とセシリア・オルコットの決闘一日前の出来事だった。

第2話・宗介とラウラ、転入する（後書き）

ここでは宗介は勝ちました。現に彼は本編では公式戦でセシリアに負けていますから、何かと因縁はある組み合わせかなと思いました。次は原作と通り一夏とセシリアの決闘です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3648y/>

IS<インフィニット・ストラトス> ふもっふ？

2011年11月9日16時08分発行